様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月３０日現在

機関番号：15501
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２００１９
研究課題名（和文）：神・仏観念の共存と相互排除をめぐる倫理思想史的研究
——超越観念の再規定の試み——
研究課題名（英文）：Co-existence and Exclusion in the Conceptualization of "Kami" and "Buddha": Concepts of Transcendental Beings in the History of Japanese Ethical Thought
研究代表者:
柏木　寧子　（KASHIWAGI　YASUKO）
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：００２６３６２４

研究成果の概要（和文）：日本思想史における神・仏観念の関係をめぐり、『古事記』の排仏的神叙述、『日本霊異記』の神仏共存的霊魂観、『今昔物語集』の天（神）と対比的な仏叙述について考察した。また、近世武士の神仏共存的天観念について、主宰天・運命天の統一的理解の可能性を探り、復古神道（国学）について、神仏混淆的庶民思想をその発生土壌として明示した。これらの成果を単著２冊、論文５本として公刊するとともに、八幡信仰研究の基礎資料として、目下託宣年表を作成中である。

研究成果の概要（英文）：In order to consider connections between the conceptions of "kami" (Japanese gods) and "Buddha", we have examined the following issues: The exclusion of Buddhism in the mythology of *Kojiki* (Uehara); Acceptance of the co-existence of "kami" and "Buddha", as revealed by the concept of the spirit that we find in *Nihon ryōiki* (Yoshida); The contrast between depictions of Shakyamuni-Buddha and Buddhist deities in *Konjaku monogatari-shū* (Kashiwagi).

Concerning late-Sengoku～mid-Edo period warrior-class conception of "ten" (perceived as Heaven's will or fate) that allowed for the co-existence of "kami" and "Buddha", Toyosawa has investigated the possibility that two perceptions of "ten" became merged. Yoshida has demonstrated that it was the pervasive intermingling of "kami" and "Buddha" in popular thought that gave rise to Revivalist Shinto (as a project of the National Learning, or kokugaku, movement) in the late-Edo and early-Meiji periods.

To date, the results of this research have been published in the form of two books and five articles. In addition, we are currently compiling a chronology of oracular messages received during worship of Hachiman-shin or Great Bodhisattva Hachiman, one that we believe will become a fundamental resource in the study of the Hachiman worship.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総　計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：日本倫理思想史
科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学
キーワード：神、仏、天、運命、霊魂、武士、近世庶民、八幡信仰

１．研究開始当初の背景

(1)関連する研究動向

「神」「仏」は日本における超越観念の主要な二つである。二観念の共存と相互排除の関係をめぐっては、辻善之助以来、主に歴史学的研究の蓄積があり、堀一郎・田村圓澄・高取正男らによって基本的図式（共存し、かつ相互排除の緊張をも孕んだ関係）が示されてきた。近年では中村生雄・山本ひろ子らによる中世思想研究が進展し、改めて二観念の関係の複雑さ、それを捉える一貫した理論の欠如が自覚されるに至っている。

他方、倫理学・倫理思想史の分野でも、和辻哲郎以来、神・仏二観念をめぐる研究が行われている。和辻は「神聖なる無」としての究極的神、および仏教的「絶対空」を重ね合わせ、独自の習合理論を示した。また湯浅泰雄は深層心理学理論を援用しつつ習合思想への接近を図った。近年では佐藤正英が「もの神」「たま神」や「絶対知」といった観念を用いて倫理学的探究を深め、自己の現存への問いにかかわる基礎範疇として超越観念を捉え返そうとしている。

(2)本研究着想の動機

以上に見るように、神・仏二観念、およびその関係をめぐっては様々な研究が行われてきた。だが、歴史学的・倫理学的研究双方の成果を踏まえ、古代から近世に至る神・仏関係を、一貫して倫理思想史的視点に立って叙述する試みは、必ずしも十分であったとは言えない。

このたびとほぼ同じ研究組織により 2005 年度～2007 年度に共同研究を行い、日本における諸超越観念の深層構造を探り、それが様々な時代・方面における具体的倫理思想に及ぼした影響を考察した。その結果、「神」「仏」が日本の諸超越観念のうちに占める位置の中枢性が明らかになってきた。二観念の関係構造は、神・仏関連テクストが突出して現れる古代・中世のみならず、近世ひいては近代に至るまで、日本倫理思想の根幹を規定しているのではないか、との予測をもつに至った。近世における「天」観念、近代における「文明」観念を捉え返す前提としても、まず「神」「仏」二観念の関係構造を、倫理思想史的視点に立って解明する価値は大きいと考え、本研究を計画するに至った。

２．研究の目的

(1)神仏習合思想の典型として八幡信仰を採り上げ、史書・縁起・霊験記・託宣集などの読解を通じ、古代から近世に至る神・仏関係思想の実態・構造の解明を図る。

(2)研究組織構成員が各々これまで行ってきた研究の成果を踏まえ、分担して以下諸点の解明を図る。

①古代における神仏習合および排仏的神道の成立過程の構造的解明。

②中世における神・仏関係思想の、とくに説話・物語解釈を通じての構造的解明。

③中世神道における神・仏の共存と相互排除の構造的解明。また、中世・近世武士の道徳形成にかかわる神・仏観念の解明。

④近世の庶民思想における神・仏混淆の実態の解明。また、国学・復古神道における仏教の位置の捉え返し。

３．研究の方法

(1)文献読解

古代から近世にかけての仏教・神道・神仏習合関係、物語関係文献を蒐集し、研究組織構成員が分担して、各時代における神・仏各観念、および二観念の関係構造に関する個別的研究を行う。加えて、八幡信仰に関しては全構成員による共同研究を行う。

①古代：仏教伝来から平安時代初期にかけての神・仏関係文献（『古事記』『日本書紀』『元興寺伽藍縁起』等）を読解し、古代における神・仏観念の共存および相互排除の関係構造について考察する。担当は、研究分担者・上原。

②中世（物語）：古代末期から中世にかけての神・仏関係の物語文献（『今昔物語集』『神道集』『説経節』等）を読解し、神・仏各観念、および二観念の関係構造について考察する。担当は、研究代表者・柏木。

③中世～近世(武士／神道)：中世から近世中期にかけての武士思想関係文献（『平家物語』『甲陽軍鑑』『三河物語』『葉隠』等）を読解し、武士の道徳思想形成にかかわる神・仏観念について、さらには、これらと他の超越観念（「天」「運命」等）との関係構造について考察する。また、中世神道において成立した諸価値（「正直」「清浄」等）に着目し、神・仏の共存と相互排除の関係構造について考察する。担当は、研究分担者・豊澤。

④近世（庶民）：鈴木正三『因果物語』や江戸時代に流布した占い書『三世相』『大雑書』等を読解し、近世庶民思想における神仏混淆の実態を明らかにする。また、『死霊解脱物

語』等の読解により、神・仏観念の共存が顕著に見られる霊魂観について考察する。さらに、本居宣長および平田派国学における仏教観について考察する。担当は、研究分担者・吉田。

⑤八幡信仰：八幡神＝八幡大菩薩は、神・仏観念の共存が最も早く生じた例として知られる。朝廷・武家・民間を問わず広範な拡がりを見せた八幡信仰については、多くの関連資料が残されているが、その思想史的読解はいまだ進んでいない。先行研究（宮地直一『八幡宮の研究』や中野幡能・飯沼賢司・逵日出典らによる最近の研究）を踏まえ、思想史的読解視点の立て方を探りつつ、中世に成立した霊験記・託宣集（『八幡愚童訓（甲本・乙本）』『八幡宇佐宮御託宣集』等）の読解に取り組む。担当は、全員。

(2)現地調査
出雲地方（出雲大社、須我神社、熊野神社、神魂神社等。2008 年）、および宇佐地方（宇佐神宮、薦八幡社、若宮八幡社、奈多八幡社等。2009 年）において現地調査を行い、神・仏観念と景観との関係をめぐり考察する。担当は、研究代表者・柏木、研究分担者・上原・吉田。

(3)研究会
年に２回、８月および３月に開催する。構成員各自が分担する個別的研究の成果、また、八幡信仰関連文献の読解結果を持ち寄り、発表して、議論を深める。研究会開催に際しては、研究組織構成員以外の研究者も招き、意見を求める。2008 年度～2010 年度、計６回の研究会に、東京大学文学部・名誉教授・佐藤正英氏を招き、意見を求めた。

４．研究成果
(1)代表者・柏木は、中世日本の神・仏観念にかかわる物語的思考を解明する第一歩として『今昔物語集』天竺部の釈迦仏関連説話の読解を行った。「神」「仏」二観念の関係を捉え返すにあたり、まずその一方である「仏」観念に関し、できるだけ詳密に内実を知ることが必要だからである。
初年度は所謂譬喩物語に基づき、仏の対比項としての「衆生」の存在理解を抽出し、論文１本にまとめた。衆生はその本性から悪を作り、必然的に苦果を受け、存在の構造上苦を免れない、というのが衆生理解の基本であった。他方、仏の存在はそれ自体叙述されることはないが、そうした衆生の存在の彼方もしくは終極に示唆されていると考えられる。
次年度は釈迦仏最後生の諸叙述に基づき、仏の「知」について考察し、論文１本にまとめた。まず、知獲得の動機として、自己の膨大な存在の意識、その存在全体にかかわる問いの意識があったことを見た。また、仏の知の特質は、衆生各人の通約不能な存在様相をそのつど具体的に知り、端緒・終極をもつ各様の物語として語る点にあることを見た。
最終年度は、天竺部に顕著な神通力に関わる叙述をもとに、天竺部における神すなわち「天」との対比も念頭に置き、仏の特質を考察し、論文１本にまとめた。そもそも神通力に関しては、智慧を本質とし、慈悲を正しい行使動機と見る諸仏典の基本的理解がある。天竺部における釈迦仏像もこの理解を踏まえていることを確認した。同時に、仏の神通力には、より多くの衆生と直接的出合いを果たさんがための、仏身拡大という傾向が強いことを見た。肉身の仏との直接的出合いに対する人々の希求が、卓越した神通力使者としての釈迦仏像を描かせていると考えられる。

(2)分担者・豊澤は、戦国時代から近世中期までの「天」観念の解明を企図し、初年度には、因果応報的「天」と、一方的に禍福をもたらす「天」とを並行的に理解する従来説に対して、これら二者の統一的把握という新たな課題を発見した。初年度の考察の結果、二者は〈子孫の繁栄〉（長い時間）という観念に深く関わっているのではないか、という思想史的な仮説を得た。具体的には淵源としての『愚管抄』の「天」から、末流としての伊藤仁斎・荻生徂徠の「天」までを射程に収めるものであった。
次年度には、『甲陽軍鑑』『三河物語』『葉隠』等の武士道関係文献を解み読き、勝敗を重大視する武士における天命と運命とが、どのようなものと観念されていたかについて考察した。主宰天と運命天の齟齬軋轢は、天に関する独特な議論の伏在を予想させるものであった。
最終年度には、引き続き、武士道関係文献を読み解き、「天（天命・天道）」「運命」等の超越観念について、神・仏共存的な世界観をふまえながら考察のまとめを行った。以上の成果を、中世神道思想や近世儒学思想をめぐる従来の研究成果とあわせ、単著『近世日本思想の基本型――定めと当為』として 2011 年 3 月に刊行した。

(3)分担者・上原は、古代における神仏習合と排仏的神道のいずれにおいても、それらの源泉として想定される『古事記』・『日本書紀』の神代神話を考察した。
初年度は、『古事記』神代神話を『日本書紀』神代神話と比較しつつ読解し、『古事記』の仏教を排する姿勢が神話叙述においてどのように反映されているのかを考察し、その成果を公開講座で発表した（「下関の神話・

伝説と観光」)。
　次年度は、引き続き『古事記』神代神話を読解し、そこに見られる知の様態を探った。そして、神話に見られる具体的な事物事象が儀礼や物語によって変容するという知の様態と、神仏を関係・共存させる知の様態との類似性を明らかにした。また、鎌倉仏教の中で唯一神と積極的に関わった一遍についても考察し、『一遍聖絵』に見られる神仏関係について読解・整理を行った。
　最終年度は、『日本書紀』欽明天皇～推古天皇までの「仏法伝来説話」と、『元興寺伽藍縁起』とを詳細に読み解き、仏法受容の過程における、神信仰原理の機能の様態を考察した。さらにそれを『今昔物語集』震旦部冒頭（巻六 1～10）と比較し、仏法受容時の神仏関係について、日本独自の原理を浮彫にした。

(4)分担者・吉田は、初年度には、『三世相』・『大雑書』類を用いて、復古神道家・平田篤胤の問いが、実は神仏の混淆した近世庶民思想の土壌から生まれたものであることを明らかにし、『因果物語』等を用いて同時代の庶民仏教思想のあり方を定式化した。以上の成果を組み込んだ単著『平田篤胤――霊魂のゆくえ』を 2009 年 1 月に刊行した。
　次年度には、神仏の共存が顕著に見られる霊魂観に焦点を定め、通時的な展望を得るべく考察を試みた。古代の『万葉集』挽歌、『古事記』上巻、『日本霊異記』、中世の謡曲数曲、近世の『死霊解脱物語聞書』冒頭部における死後存在の取り扱いを比較考察し、その一部を論文１本として発表した。
　最終年度には、近世庶民における神仏混淆思想について、通説化している和辻思想史図式を批判的かつ具体的に乗り越える作業を行い、神仏混淆思想の基盤に近世特有の「擬制としての親族共同体」の観念があり、その根源には特殊な「この」因縁の直観があることを明らかにした。考察結果の半分を論文１本として発表した。また４件の研究会発表を行った。

(5)研究代表者および分担者が共同で取り組んだ八幡信仰研究では、①研究会および②実地調査を行った。

①研究会は、３年間の研究期間内に、年２回、佐藤正英氏（東京大学文学部・名誉教授）を招いて開催し、各自研究成果の発表と共同討議とともに、共通課題である八幡信仰に関わる資料読解を行った。
　初年度は、『八幡愚童訓』（甲・乙本）を読解し、甲・乙本のそれぞれに記述されている八幡信仰の特質、および八幡信仰に特有の神仏関係理論を整理した。そして、八幡信仰思想の中世諸思想への影響、および諸思想（特に一遍などの浄土思想）との関係について新たな知見を得ることができた。
　次年度より『八幡宇佐宮御託宣集』の読解を進め、神の「託宣」がどのような状況で現れ、神仏関係思想の構造化においてどのような意味・役割を持っていたのかを考察した。
　最終年度には、引き続き『八幡宇佐宮御託宣集』を読解し、その思想解明の基礎作業とすべく、神の「託宣」を時代順に整理した年表作成に取り組み、目下およそ半分の巻の作成を終え、修正・拡充中である。

②実地調査は、佐藤正英氏を加え、初年度および次年度に実施した。出雲地方および宇佐神宮周辺を調査対象とし、聖地の景観と超越観念の関係構造について考察した。
　初年度には、出雲地方の聖地（出雲大社、須我神社、熊野神社、神魂神社、美保神社等）の実地調査を行った。
　その結果、出雲地方の聖地景観においては、特に“海”が超越観念の形成に影響を及ぼしていることを明らかにした。
　次年度には、宇佐神宮周辺を巡り、宇佐行幸会や八幡信仰成立に関係する神社・山・池などの聖地（宇佐神宮、三角池、薦八幡社、八面山、若宮八幡社、奈多八幡社等）をくまなく調査し、新たな資料も蒐集することができた。
　調査の成果は、行幸会という宇佐神宮の重要神事について、景観構造の面から考察できたことである。行幸会は、その起源や意味に関していまだに不明な点が多く、様々な要素が絡み合った複合的な神事であるが、少なくともそのルートにおいて、八面山、三角池、奈多八幡社の浜辺とそこから見える島の景観など、山（磐座）・川・池・海・島という聖地景観の要素が複合的に考慮されているという景観構造的な意味が確認できた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①<u>柏木寧子</u>、「『今昔物語集』天竺部における釈迦仏理解の一側面――神通力をめぐって」、『日本仏教綜合研究』、査読有、第 9 号、2011 年、pp. 105-130。

②<u>吉田真樹</u>、「近世庶民仏教思想と和辻思想史図式の捉え直し（上）」、『思想史研究』、査読無、12 号、2010 年、pp. 1-11。

③<u>吉田真樹</u>、「『日本霊異記』冒頭話の孕むもの（下）」、『思想史研究』、査読無、11 号、2010

年、pp. 1-9。

④柏木寧子、「『今昔物語集』天竺部における釈迦仏ならびに衆生の理解(3)」、『山口大学哲学研究』、査読無、17 巻、2010 年、pp. 1-17。
http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/handle/C070017000001

⑤柏木寧子、「『今昔物語集』天竺部における釈迦仏ならびに衆生の理解(2)」、『山口大学哲学研究』、査読無、16 巻、2009 年、pp. 1-19。
http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/handle/C070016000002

〔学会発表〕（計 2 件）
①吉田真樹、「『霊の真柱』における天・地・泉――死の空間の近代化」、日本思想史学会 2008 年度大会パネルセッション「日中韓における洋学の伝来と「天」観念の変容」、2008 年 10 月 19 日、愛知教育大学（愛知）

②吉田真樹、「平田篤胤對於「死」的空間之論述――與「天」・「地」・「泉」的關係」（陳昭心訳。日本語標題「平田篤胤における「死」の空間――「天」・「地」・「泉」との関わりにおいて」）、國際學術研討會「天、自然與空間」（日本「東亞的文明衝突與“天”觀念的演變」研究班・國立清華大學人文社會研究中心・國立臺灣大學中國文學系共催）、2008 年 9 月 25 日、台湾大学(台湾)

〔図書〕（計 2 件）
①豊澤一、ぺりかん社、『近世日本思想の基本型――定めと当為』、2011 年、262 ページ。

②吉田真樹、講談社、『平田篤胤――霊魂のゆくえ』、2009 年、275 ページ。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
柏木　寧子（KASHIWAGI　YASUKO）
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：00263624

(2)研究分担者
豊澤　一（TOYOSAWA　HAJIME）
山口大学・人文学部・教授
研究者番号：10155591

上原　雅文（UEHARA　MASAFUMI）
東亜大学・人間科学部・教授
研究者番号：30330723
吉田　真樹（YOSHIDA　MASAKI）
静岡県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：20381733

(3)連携研究者
なし